

MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

NO.177 



CONTENTS

- 01 表紙・目次
- 02 展示報告「秋田藩の絵図―描かれた城と城下町―」
- 03 展示報告「人形博覧会―土偶からリカちゃんまで―」
- 04 展示報告「真澄採録怪異譚―ささき糸びす氏の絵画とともに―」
- 05 イベント報告「『軒の山吹』再現」
イベント報告「教員のための博物館の日」
- 06 学芸ノート（先覚部門）
- 07 学芸ノート（民俗部門）
- 08 博物館の風景

新着収蔵資料紹介

火の出るポンプ（取扱説明書付き）

詳細は不明ですが、昭和10年代頃に東京の会社が製造・販売していたものと推測されます。石炭や薪などに着火するために使用された道具で、本体は真鍮製です。燃料を注入した後、マッチで先端部に点火し、丸い取っ手の付いたポンプを押すと、「火はウナリを生じて放出」されるそうです。説明書には「子供にも容易に使へ危険なし」などと書かれていますが、本当に当時の家庭では子供たちにも使わせていたのでしょうか。この他にも仰々しい宣伝文句が説明書には散りばめられており、当時の時代風潮が感じられます。（全長26.0cm、長径4.5cm）



企画展「秋田藩の絵図―描かれた城と城下町―」

当企画展では、県内に伝存している秋田藩の絵図資料、特に城下町や城郭を描いた城絵図を取り上げました。周知の通り、秋田藩においては藩主佐竹氏の居城となった久保田城の他にも、横手城と大館城が支城として幕末まで存続しました。そこでこの3か所の城絵図を展示の柱としましたが、このほかにも秋田藩領を描いた六郡絵図、江戸初期に城が取り壊された角館や湯沢の絵図、さらには明治時代の秋田市の地図など、様々な関連資料も同時に紹介しました。また展示室内には2台のモニターを設置し、絵図に描かれた久保田城下と秋田市街地の現況とを来館者に比較してもらうことなども試みました。

開催期間中は解説会を5回実施しました。いずれの回にも定員を大幅に上回る参加者が集まり、多くの方々の関心の高さを実感しました。展示室内では、絵図を食い入るように鑑賞し、自身の居住地が描かれていることを確かめている来館者の姿などが見受けられました。

本展の開催にあたり資料借用等をご快諾いただいた関係機関の皆様へ、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

(歴史部門：黒川 陽介)

展示構成と主な展示資料

第1章 国絵図のかけら ―藩領と境目―

六郡絵図、秋田領六郡絵図(屏風装)、秋田新庄仙台南部境絵図 など

第2章 藩主のお膝元 ―久保田―

御城下古絵図、羽州久保田大絵図、外町屋敷間数絵図、出羽国秋田居城絵図、御城中略図 など

第3章 残された支城 ―横手と大館―

横手城下全図、横手絵図、阿桜城(横手城)全景、大館城下絵図、大館城跡出土品 など

第4章 城のない「城下町」

湯沢外町絵図、仙北郡角館土民居所図、茂木屋敷跡出土品 など

第5章 近代を迎えた久保田

羽後国秋田郡秋田城絵図、秋田庁下市街図、秋田県公園絵図、秋田市詳密地図 など



特別展「人形博覧会－土偶からりかちゃんまで－」



58体の押し絵は圧倒的な存在感がありました。
部屋一面に飾った様子はさぞ華やかだったことでしょう。

祈りの道具であった人形が鑑賞・愛玩の道具となり、生活の中に浸透していく姿を約850体の人形により紹介しました。学術的な研究の対象となっている古い時代の人形と、趣味として親しまれている現代の人形とを、一つなぎの歴史として眺めようという目論見でした。会場では人形の思い出話に花を咲かせたり、愛用の人形と写真撮影を楽しんだりする姿が見られました。

(歴史部門 新堀 道生)



男の子の遊び道具。
片付けなさいと怒られる3秒前の様子を表現しました。



シルバニア村にバスが着いたところ。



かつて家々の居間や応接間に鎮座したポーズ人形
(フランス人形)。



推しぬいコーナーでは「A3!」のぬいぐるみが
SNSで話題になっていました。



真澄採録怪異譚

— ささき 糸 び す 氏 の 絵 画 と と も に —

●展示について

各地を巡り歩き、その土地で見聞きした様々な事柄を記録した菅江真澄。真澄が採録したものの中には、何とも奇妙で怪しげな内容の話も多く含まれていました。今回の菅江真澄資料センター企画コーナー展では、そうした真澄の採録した「怪異譚」について、県内の民俗行事などを題材にイラスト制作に取り組んでいる、ささき糸びす氏の絵画とともに紹介しました。真澄の記録の特徴は図絵を描いていることですが、残念ながら採録した怪異譚の多くは文章のみの記録で、図絵を伴っていません。そこで、真澄が採録した怪異譚を元にして描かれたささき氏の絵画とともに、その魅力を知っていただく契機になれば、との思いから本展を企画しました。

実際の展示には、時季と展示内容が合致した結果、多くの来館者に来ていただくことができました。今夏の異常な暑さの中、少しでも涼をとっていただくことができたのであれば幸いです。展示では8つの怪異譚を取り上げましたが、真澄が採録した怪異譚はまだありますので、本展を機にその他の怪異譚や広く真澄の記録についても興味・関心を持っていただければと思います。

●展示資料一覧

ささき糸びす氏画	真澄著作及び実物資料／所蔵先
「有耶無耶の関」	《秋田のかりね》／大館市立栗盛記念図書館蔵
「男鹿のモレビ」	《粉本稿》／大館市立栗盛記念図書館蔵
「太平山の三吉」	《月のおろちね》／館蔵写本
「化物坂」	《雪の出羽路雄勝郡第2巻》／館蔵写本
「影捕沼の化魚」	《雪の出羽路平鹿郡第1巻》／館蔵写本
「音鳴らす釜」	《軒の山吹》／館蔵写本 「手取釜実物」／個人蔵(能代市)
「姫ヶ岳」	《筆のまにまに第5巻》／大館市立栗盛記念図書館蔵写本 《阿仁の沢水》／館蔵写本
「川熊」	《月の出羽路仙北郡第5巻》／館蔵写本

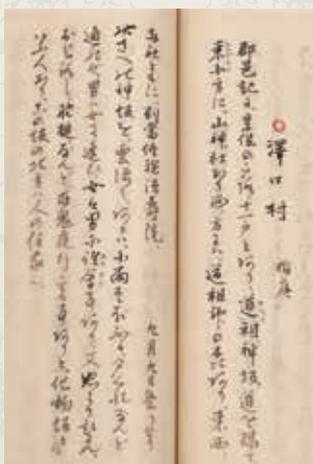


「姫ヶ岳」

●展示資料の紹介



「化物坂」



《雪の出羽路雄勝郡第2巻》
館蔵写本より一部拡大

沢口村(湯沢市稲庭町沢口)にある坂道の話。その坂道の東側には山神の社が、西側には道祖神が祀られている森がある。雲が立込める日や、小雨が降る夕暮れなどにこの坂道を通ると、男性であれば女性とすれ違い、女性であれば男性とすれ違うという。

また「ぬらりひょん」「おとろし」「野槌」などといった妖怪の類が「百鬼夜行」をすることもあるという。「さながら化物坂だ」などという人もいる。この坂の北側には民家がある。

(真澄部門：角崎 大)

『軒の山吹』再現 ～菅江真澄が記録した美しく風情ある風習～

『軒の山吹』は、江戸時代の紀行家・菅江真澄が記録した日記で、現在の秋田市金足地区、下新城地区、男鹿市、潟上市、五城目町を訪ね歩いて見聞きしたことが記されています。文化8年(1811)に金足を訪れた真澄は、ある風習を目にします。それは、丸めた餅を長串で貫き、それに山吹の花を束ねて家々の軒先に飾る、というものでした。この風習には魔除けや家の吉凶を占う意味があると考えられ、軒に挿した餅を鳥がついばんできれいになると吉兆であるとされました。鳥が餅をついばむと同時に山吹の花がきれいに散りこぼれます。その美しい様に心打たれた真澄は、日記題を『軒の山吹』としました。

当館では、真澄が書き残したこの美しく風情ある風習を、地域の方はもとより多くの皆さんに知ってもらい、次代に継承していこうということから、『軒の山吹』を分館・旧奈良家住宅に再現する活動を行っています。旧奈良家住宅の北側に位置する丘陵地では、春、八重桜とともに山吹の花が一面に咲きます。この地を所有する方からのご厚意で山吹を提供していただき、博物館ボランティア「アイリスの会」の会員と一緒に刈り取りから飾り付けまでの作業を行います。

本来のように鳥が餅をついばんで花びらが散る様子をご覧ください。ところまではいきませんが、茅葺き屋根の母屋に山吹色が映える趣ある光景を多くの皆さんに楽しんでいただきました。

(普及・広報班：藤原 尚彦)



教員のための博物館の日 令和5年8月3日(木)

博物館のトリセツ ～先生にお伝えしたい博物館の魅力～

「教員のための博物館の日」は、学校の先生に博物館に親しみを持ってもらうとともに、博物館の学習資源を知ってもらうことを目的とした全国規模のイベントです。

当館で開催したイベントには、小・中・高・特別支援学校等から13名の参加があり、校外学習での活用方法、学芸職員による展示解説、模擬出前授業体験、貸出可能な資料とその活用例の紹介など、盛りだくさんのプログラムを体験していただきました。展示室見学では、担当する児童・生徒を想定し、校外学習での活用場面について具体的に考えている姿が見られました。また、貸出可能な資料の紹介の際には、先生方に体験していただいたり効果的な活用法を説明したりする中で多く質問が寄せられ、関心の高さがうかがえました。

参加した先生方からは、「とても参考になり、学校での単元配列をもう一度見直すと活用できそうです。」「いろいろな分野の出前授業ができると知った。スペシャリストによる授業はインパクトがある。」「貸出資料について、実物を触ったり、見たり、体験できることは知らなかったので参考になりました。」など、授業での活用に関する感想の他、「自然展示室では、科学的なものの見方が得られた。」といった、自身の学びの深まりに関する感想もいただきました。

博物館の人的・物的機能を十分に活用していただき、学校と博物館が連携・協力して充実した教育活動が展開できるよう、これからも創意工夫を重ねていきたいと思っております。

(学習振興班：三浦 益子)



展示室見学



貸出可能資料紹介

小野進と秋田犬

秋田県には、数多くの天然記念物が存在します。貴重な動植物や地質・鉱物などがそれにあたりますが、その中でも多くの人々に親しまれているのが、秋田犬ではないでしょうか。りりしくも愛らしい顔立ちで、日本だけではなく海外でも人気の犬種です。

秋田犬は秋田県が原産の最北系統に属する日本犬で、胴体、肢、吻（口の周り）ががっしりとしており、飼い主に忠実な性格をしているのが特徴です。日本犬では唯一の大型犬種で、昭和6（1931）年に国指定天然記念物となりました。

秋田犬の天然記念物指定に向けて尽力した人物の一人が、由利本荘市出身の小野進（1887-1953）です。小野は博物教師のかたわら、動物研究のために全国を調査し、記録をつづりました。大正15年には、県から秋田県史蹟名勝天然記念物調査委員を委嘱されています。

秋田犬が天然記念物に指定されるまで、順調にはいきませんでした。大正9年、東京帝国大学の渡瀬庄三郎教授が天然記念物調査委員として大館を訪れ、秋田犬の精査を実施しました。ところが、当時の秋田犬は闘犬ブームによって別の種との交配が進み、秋田犬本来の血筋・形の優良犬が見られず、指定は実現しなかったのです。「これではいけない」と思った小野は、秋田犬の保存について緊急かつ重要な問題として、新聞等で何度も強く訴えました。その結果、愛犬家でもあった大館町長の泉茂家が奮起して優良犬の飼育に尽力。これに大館愛犬協会長の田山弥一郎も協調し、奨励に努めたところ、本来の姿を取り戻した秋田犬が目立つようになります。そして、昭和6年に東京帝国大学の鏑木外岐雄教授が再調査のため来県し、秋田犬は満を持して天然記念物に指定されたのでした。指定後も、小野は自らを秋田犬の「宣伝係」として、新聞や雑誌、ラジオを通じて全国に情報を発信しています。

おそらく世界で一番有名な秋田犬、ハチ公は、ちょうど100年前の大正12年に大館で生まれました。昭和7年に新聞で紹介されたのをきっかけに、人々に知られるようになります。小野もその一人で、すっかりハチ公の虜になり、昭和9年には念願の面会を果たしました。小野はハチ公に関する記述も数多く残しており、『忠犬ハチ公』という歌の作詞もしています（作曲は『おもちゃのマーチ』で知られる鹿角市出身の小田島樹人）。

秋田犬の天然記念物指定から少し遡る昭和2年、小野は初めての著書となる『自然の国宝と日本人』を出版しました。全国の優れた自然や天然記念物について分かりやすい文章で紹介しており、写真も豊富です。発売から1か月余りで三版が発行され、動物学者でもあった昭和天皇もご覧になるなど、大変な話題となりました。その後も自然の手厚い保護を訴え続け、秋田犬のほかにも声良鶏や小又峽など、秋田の動物や自然を全国に紹介し、保存に貢献しました。



（秋田の先覚記念室：千田 育栄）

農具のあれこれ ～旧奈良家住宅に展示している農具より～

旧奈良家住宅は、秋田県中央部の海岸地帯にある典型的な大型両中門造りの農家建築です。1965年（昭和40）に重要文化財に指定されました。県立博物館に隣接する文化財として広く公開するために、1975年（昭和50）に分館としました。奈良家は、江戸時代初期にこの地に土着して以来の豪農で、現存の住宅は宝暦年間（1751～1763年）に3年の歳月をかけて完成したものです。この旧奈良家住宅では、寄贈された農具を展示しています。その中から3点の農具を紹介します。

横槌（よこづち写真1）は、藁をたたくための農具です。藁をたたくことによって藁の茎を柔らかくし、節の細胞を押し節切れを防ぐことができます。このことによって藁全体が柔らかくなり細工がしやすく丈夫なものが作られることになります。その藁は飾り、縄類、草履やわらじなどの履き物、蓑やケラなどの着物類、ムシロやゴザなどの住まいの用具、米俵に使われました。横槌はその形が頭と首に似ていることから、その年のうちに一家で続けて2人の人が亡くなったときに、次の人が亡くならないように身代わりとして2人目の葬式の時に棺桶の中に入れた地域もありました。

踏み鋤（すき写真2）は、テコの原理を使って土を掘り起こす農具です。この踏み鋤は、木の幹を切って枝分かれした部分を利用して一本造りの鋤になっています。一本造りで継ぎ目がないので丈夫でした。しかし、自然の木の枝から取る柄の部分は真っすぐなものはありません。そのため、理想的な柄を自然の木から得るには非常に難しいことでした。（写真3）。

ふくべ（写真4）は、ヘチマの実を取り、水を入れて腐らせた後、乾燥させます。その中に種籾を入れて、凍らせないで保存するためのものです。「ひょうたんから駒」ということわざがありますが、駒は馬ではなく米であるという説もあります。

（民俗部門：深浦 真人）



横槌（写真1）



踏み鋤（写真2）



手に持っている踏み鋤（写真3）



ふくべ（写真4）

博物館教室



県立大学農場で、綿の栽培方法のコツを学びました。参加者の自宅では、今のところスクスク育っているようですが・・・綿が沢山実るといいですね！



「真澄に学ぶ教室 講演会 県外の日記を読む」

日記の解説を聞いてから、名場面などを音読している参加者。真澄の書いた記録について理解を深めています。



「簡単！葉っぱの標本づくり」

博物館周辺で採集した葉っぱをラミネートフィルムに挟んで葉の表と裏の両面が見られる標本を作製しました。作業する眼差しは真剣です。



「からむしを績む」

からむしを苧引きし、布の基となる繊維をとりだしました。

「綿を紡ぐ」

県立大学から綿の苗をいただき、各自の家で栽培中。その後、収穫した綿から糸を紡ぎ、布を織る予定です。



参加者の蔵書票。オリジナルの図案に個性が光ります。



「先覚入門 得之の蔵書票づくり」

今年の先覚記念室コーナー展は勝平得之を取りあげます。それに先駆け行われた教室では、版木を彫って蔵書票をつくりました。

「化石と地層の観察会」

男鹿市安田海岸にて、地層の観察と化石の採集を行い、大地の生い立ちとその調べ方について学びました。

展示・イベント・学校対応



軒の山吹再現にあたって、博物館ボランティア「アイリスの会」が山吹の刈り取りや飾り付けを行いました。



ミュージアムコンサート

ジャズピアニストの早川泰子さんをお招きし、「JAZZ で巡る世界の旅」を開催。多くの来館者がピアノとバイオリンの美しい旋律に耳を傾け、心地よいひとときを過ごしました。



『軒の山吹』再現

4月20日(木)から23日(日)計4日間、旧奈良家住宅にて菅江真澄が記録した美しく風情ある風習を再現しました。

ギャラリートーク

企画展「秋田藩の絵図」のギャラリートークでは、毎回定員を超える程の盛況ぶりでした。



八橋人形の絵付け体験

特別展の付帯事業で、八橋人形の絵付け体験を行いました。小さい干支人形がかわいい♪



「教員のための博物館の日」

毎年夏休みに教員向けに開催しているイベント。博物館を積極的に学校活動で利用してもらうために、様々な提案を行いました。



高校生のセカンドスクール利用

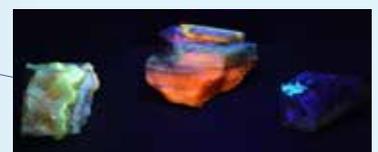
県内高校生が藍の絞り染め技術を学習するために、セカンドスクールで来館しました。暑い中でも必死に技術の向上に励みました。

子供の成長を願う一天神人形

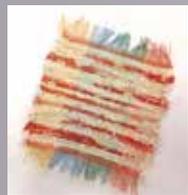
ふるさとまつり広場で、4月20日(木)～6月20日(火)まで八橋人形を中心とした天神人形を展示しました。

北海道石の展示

2023年の国際鉱物学連合によって承認された新鉱物、北海道石をいち早く展示♪紫外線を当て始めてから強く蛍光を発するまで10秒程度かかります。



わくわくたんけん室で、毎月開催している「裂き織り体験」。「アイリスの会」ボランティアチームが親切に教えてくれます。コースターが作れます♪



裂き織りコースター



八橋人形